

ペテルブルグ悲歌

アフマートワの詩的世界

安井侑子



АХМА
АХМАТОВА

ペテルブルグ悲歌

アフマートワの詩的世界

安井侑子



中央公論社

ペテルブルグ悲歌

アフマートワの詩的世界

一九八九年五月三〇日初版印刷

一九八九年六月一〇日初版発行

著 者 安井侑子

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 図書印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替東京二一三四

©一九八九 検印廃止

ISBN4-12-001823-7

ペ
テ
ル
ブ
ル
グ
悲
歌
目
次

序章	ドストエフスキーのロシア	7
第一章	皇帝村の水の精 ^{ニシ}	23
第二章	詩の出発——〈銀の時代〉	40
第三章	処女詩集『タベ』	57
第四章	カフェー『野良犬』のボヘミアンたち	70
第五章	戦争と革命	92
第六章	一九二一年夏	120
第七章	二つのロシア——アフマートワとマヤコフスキー	141
第八章	^ア 『ANNO DOMINI MCM XXI』 ^ン ^ド ^ミ ^ユ	161
第九章	沈黙とミューズ	178
第十章	一九三〇年代の始まり	194

第十一章 『レクイエム』

第十二章 一九四〇年——〈記憶〉への旅の始まり

第十三章 十字架の街

第十四章 ジュダーノフ批判

第十五章 忘却の河の向う岸

第十六章 『ヒーローのない叙事詩』

第十七章 コマローヴォの春

エピローグ

主要参考文献

331

あとがき

333

213

233

248

259

272

280

311

329

ペテルブルグ悲歌——アフマートワの詩的世界

亡き父に捧げる

序章 ドストエフスキーのロシア

へ……われらが生れきたのはその時代……^{とき}

アンナ・アフマートワが、みずからの半生を振りかえりながら、自伝的な連作詩『北の悲歌^{エレジー}』を綴りはじめたのは、彼女がちょうど五十歳を迎えた一九四〇年秋であつた。その第一篇「前史」は、彼女自身がこの世に生を享けた半世紀まえの遠い過去へと、時空を超え、記憶のタイムトンネルを遡りながら、意味深く鮮明な一行にはじまっている。

ドストエフスキーのロシア……

〈ドストエフスキーのロシア〉……アフマートワの七十七年にわたる生涯を語るプロローグとして、この言葉ほどふさわしいものはない。〈ドストエフスキーのロシア〉は、アフマートワの詩の揺籃であり、同時にまた彼女の魂が永遠の眠りについた墓土でもあつた。

〈ドストエフスキーのロシア〉……この言葉からたちまち脳裡に浮かぶのは、どことなく陰鬱でもの悲しい、北国特有の都会の風景、暗い水をたたえた運河、どんよりと低い空を覆う冷い夜霧、ネヴァ河の岸と御影石の橋、煤と煙に汚れた煉瓦の建物、凍てつく冬の夜空にまたたくガス燈の光……それはドストエフスキーの小説のほぼ大半の舞台となった、十九世紀ロシアの首都ペテルブルグの街の風景にはかならない。あるいはそのペテルブルグの暗い運河のほとり、煤けた建物の屋根裏部屋や地下室に肩を寄せあいながら住む貧しく、虐げられた人びと、敬虔な憐れみにみちた人びとの姿である。

ドストエフスキーのロシア。

月は鐘楼のかげに、やや隠れ、

居酒屋は賑わい、辻馬車が疾駆し、

五階建ての建物^{ビル}が聳え立つ、

ゴローホヴァヤ街に、ズナメーニヤに

スモーリヌイ寺院に近く……

〈ドストエフスキーのロシア〉——この一行に作者アフマートワがこめた意味の重さは、はかりしれないものがある。それはスターリン治下の一九四〇年代、ドストエフスキーの名すらが故国ソビエトではほとんど禁断のひびきをもっていた時代であることがまず第一である。ソビエトにお

いてドストエフスキーの名が禁制の輓を解かれるのは、スターリン批判（一九五六年）以後のことであった。さらに「ドストエフスキーのロシア」というこのキーワードは、ブーシキン、ゴリ以来謳いつがれてきた「誇り高い、悲劇的な」街ペテルブルグ、ことにドストエフスキーによってその頂点を極めた「永遠の聖なるロシア」、ロシア正教的信仰にみちた民の敬虔な祈りの故郷としてのロシアに対する深い愛にみちていることである。それは二十世紀初頭、ロシアを訪れた詩人リルケをも深く捉えた神に間近いロシア、深遠なるロシアへのはかりしれぬ愛を湛えた一行なのだ。

アフマートワがこの『北の悲歌』『前史』の冒頭で、みずからの生の「原風景」として甦らせるのは、正確に言えば一八七〇年～八〇年代ペテルブルグの光景である。辻馬車、巨大な建物、ダンス教室や両替屋の看板——的確なディテールによって、彼女は、半封建的な夢をむさぼっていたロシアが急速に資本化の波に洗われていく時代の首都ペテルブルグの相貌を甦らせている。アフマートワの生の「前史」は、まさしくこの「ドストエフスキーのロシア」Ⅱ（十九世紀のペテルブルグ）に始まるのである。いや、正しく言えばその始まりは、すでにこの「十九世紀ペテルブルグ」の終焉——世紀末と、さらに四半世紀後の「十月革命」に向って一歩ずつ突き進んでいく終末と変革の時代の幕開けと重なっている。この「前史」は、アフマートワ自身と彼女と同時代の詩人たちにとって、運命的序曲ともいえるのである。

この『北の悲歌』『前史』において、アフマートワは彼女の生の原風景である「十九世紀ペテルブルグ」を、幼時の記憶のエコーを通し、イマージナティヴに再構築している。例えば、当時

の風俗、インテリアを見事に甦らせた次の数行――

スカートの衣ずれ、格子縞の肩掛け／胡桃製の鏡飾りは／アンナ・カレーニナ風に雅びやか／細長い廊下のあの壁紙は／黄色い石油ランプの下で／わたしが幼な心に見とれたもの／
そして、長椅子のうえのあのフラシ天……

その時代の再生は、まさに文学的、イマジナティヴな再生であり、ここに甦るのはさまざまな文学的連想に彩られたペテルブルグ像にはかならない。この「前史」には、ドストエフスキーのみならず、シCHEDリン、ネクラソフ、トルストイ、ツルゲーネフ等、多くの作家、詩人たちの名がペテルブルグとの連想において想起される。いいかえれば、アフマトワにとってのペテルブルグは、何よりもまず、この街と固い絆で結ばれた作家、詩人たちによって謳われたペテルブルグ、すなわち作家たちの視線を通し、現実の姿の背後に凝視され、幻視されたもう一つのペテルブルグ、〈幻想のペテルブルグ〉像にはかならない。

ペテルブルグは、アフマトワにとって、ドストエフスキーの、ゴーゴリの、プーシキンの幻視した街、この街と運命的な絆で結ばれた作家や詩人たちの、時を超えたコミュニティー（運命共同体）としてまず在るのだ。そしてこの運命的な絆をみずからの生の起点にもしっかり見すえるところから、『北の悲歌』は始まるのである。

では、この作家や詩人たちの幻視した〈夢幻のペテルブルグ〉、あるいは〈ペテルブルグの神

話」とは何なのか？

ドストエフスキーはペテルブルグを「ありとあらゆる街のうちで、もつとも幻想的で人工的な街」(『地下室の手記』)と呼んだ。これはたんなる文学的イメージにとどまらず、ピョートル大帝によって築かれたロシア帝国の首都ペテルブルグ——Peters-burg——が生れながらに負った歴史的宿命にほかならなかった。十八世紀の初頭、後進ロシアの急速な近代化を夢みるピョートル大帝によって、悪疫や洪水の危険に脅かされるフィンランド湾の沼地に、〈自然〉そのものに逆いながら強大な権力と夢想の力をもって建てられた街、これが近代ロシアの象徴としての聖ペテルブルグであった。茫漠と果てしなく拡がるロシアの大地の、北辺の密林凍土地帯に忽然と出現したこの非ロシア的、西欧的で豪華壮麗な街は、そもそもの初めから、幻か夢、あるいは蜃気楼のようにいつか消え失せる〈夢幻性〉をその華麗な姿の奥にかくしていたのである。十九世紀ロシア文学の底流を流れる〈幻想のペテルブルグ〉というテーマは、ドストエフスキーよりさらに古く、ゴッリ、ブーシキンへと遡及し、またその流れはドストエフスキー以降、世紀末にいたってブローク、ベールイ等シンボリスムのうちに甦り、さらにその水脈はアフマトワ、マンデリシュタム等アクメイストの潮流に受け継がれ、壮大な〈神話〉の終焉——『白鳥の歌』を奏でることになるのである。言いかえれば〈幻想のペテルブルグ〉のテーマは、ロシア十九世紀文学を縦につらぬき、二十世紀初頭へとさらに流れいり、今日なおブロッキー(一九八八年ノーベル文学賞受賞)等の作品のうちに脈々と受けつがれているのだ。

十九世紀の初頭、〈夢幻の都市ペテルブルグ〉という底深く不気味なテーマをロシア文学史に

はじめでもたらしたのは、プーシキンの『青銅の騎士』（一八三三年）であった。ヘテルブルグ物語」という副題をもつこの叙事詩の冒頭は、後進ロシアの近代化という〈野望〉に燃えるピョートル大帝が、ネヴァ河口の荒涼たる沼地に新しい都を築こうと決意した歴史的モメントにはじまっている。

荒涼たる海の汀、^{みぎわ}

大いなる野望にみちて彼は立ち、
はるか彼方を見つめていた。ネヴァは

滔々とそのまえを流れ、

哀れな独木舟がただ一艘

さみしく水面をすすんでいる……

霧にかくれる太陽の

光も射さぬ密林は

あたり一面にざわめいていた。

そして、彼は思う。

『ここに都市が築かれよう、

傲岸な隣人に備えて。

天がわれわれに命ずるのだ、

ここにヨーロッパへの窓をひらき、

この海辺にしっかりと足を踏まえよ』と……

ピョートルのこの〈野望〉はただちに実行に移され、新都の建設は一七〇三年に着工、その九年後の一七一二年には早くも旧都モスクワからペテルブルグへの遷都が成った。後進ロシアは、文字通り、奇蹟的な大事業をやりとげたのである。

だが、すでに述べたとおり、この〈野望〉実現の蔭には、後進ロシアの野蛮な中央集権制のもとで数知れない犠牲がはらわれねばならなかった。悪疫や熱病のはびこるネヴァ河口の沼沢地における苛酷な労働と容赦ない鞭の下で、何万もの人命が失われ、新都ペテルブルグの土の下には屍の山が累々と折り重なった。またピョートルの勅命によって、国中のあらゆる石造建築は新都建設のため禁止され、地主貴族は労働力提供と莫大な税金納入を義務づけられた。情け容赦ない強権と民衆の犠牲によって、新都は建設されたのである。

旧首都モスクワに象徴される〈古きロシア〉を忌み嫌い、根こそぎにし、ひたすらロシアの西欧化、近代化をめざした皇帝ピョートルの改革、それはピョートル個人の強烈な人格、専制君主による前代未聞の事業であり、新しい都ペテルブルグ St. Petersburg は、ロシア帝国の輝かしい未来の象徴であった。だが国民の大半にとって、それは人骨の上に建てられたアンチ・キリストの街、呪われた都であったことも事実である。呪われ、蜃気楼のようにいつか消えゆく街

——ペテルブルグは、その出発点からこうした不吉な呪いの影をひきずっていた。

だがこうした呪いをよそに、ピョートルに続くエリザヴェータ、エカテリーナ両女帝のもとで極北の荒野に出現したこの新都は、驚くべき早さで成長し、ヨーロッパ各地から招かれた有名な建築家たちの手で次々と豪華な装いをほどこされていった。そして一世紀ののち、十九世紀初頭、アレクサンドル一世の治下には真に華麗さをきわめ、繁栄の頂点に達するのである。まさしく、プーシキンが謳ったように——

……若き都は／北国の精華とし、奇蹟として／密林の闇から、沼地の泥濘から／豪奢に、いと誇らかに起ちあがった……その活気づいた兩岸には／宮殿や塔の壮麗なる建物が櫛なし／世界の果て果てから／船が群をなし／豪華な埠頭めざし押しよせてくる……（『青銅の騎士』より）

ナポレオン戦争でモスクワが焼失した一方で、ペテルブルグは、ヨーロッパ屈指の建築家カルロ・ロッシの手によってローマ風円柱や、エーゲ海風柱廊で飾り立てられ、極北の白っぽい青空のもとに佇む〈北方の美女〉の異名をとることになる。W・ウェイドレが書いたように、まさしく初夏の白夜の宵など、街をいろどる花崗岩は白っぽい空に溶けこみ、円柱も薄明りのなかにまるで白い影のように浮かびあがり、この街全体が蜃気楼さながら、この世のものとも思えぬ幻想美をただよわすのであった。（『ロシア文化の運命』）